令和５年度　全国学力・学習状況調査結果について

紀北町教育委員会
令和５年９月

本年４月１８日に小学校第６学年児童と中学校第３学年生徒を対象に実施しました「全国学力・学習状況調査」について、分析結果がまとまりましたので、以下のようにご報告いたします。

本調査は、学校における児童生徒への教育指導の充実や家庭学習も含めた学習状況の改善等に役立てる目的で実施しています。また、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、教職員の授業指導法の改善と、教育施策の推進に役だてています。

本調査の学力の関する調査結果は、児童生徒の学力の全てを表すものではありません。しかし、適切に調査結果の分析を行い、教科指導方法の改善に役立てて、一人一人の個別最適化した学習と協働的な学習の充実・改善に役立てて、今後の紀北町の学校教育の一層の充実を図ってまいります。

1　調査の概要

（１）調査の目的

①教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習と生活状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図ります。

②学校における児童生徒への教育指導の充実と、学習状況の改善等に役立てます。
以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立します。

（２）調査の対象学年

小学校第６学年児童　及び　中学校第３学年生徒

（３）調査の内容

①教科の調査

・小学校は、国語、算数　　（２教科）
・中学校は、国語、数学、英語　（３教科）

②生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問調査

③学校に対する質問紙調査

指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する質問調査

（４）調査実施日（全数調査）

令和５年４月１８日（火）

（５）本体調査を実施した学校・児童生徒数〔紀北町〕

【小学校調査】

	対象学校数	実施学校数（実施率）	児童数
小学校	８	８（１００％）	７６人

【中学校調査】

	対象学校数	実施学校数（実施率）	生徒数
中学校	４	４（１００％）	７９人

（６）調査結果の取扱いに関する配慮事項（実施要項抜粋）

調査結果については、本調査の目的を達成するため、自らの教育及び教育施策の改善、各児童生徒の全般的な学習状況の改善等につなげることが重要であることに留意して、適切に取り扱います。

その際、本調査により測定できるのは学力の特定の一部分であること、学校における教育活動の一側面に過ぎないことなどを踏まえながら、序列化や過度な競争につながらないよう十分留意します。

2　教科の調査結果概要

（１）教科の調査の全体的な結果概要

①本調査の結果について、本年度から文部科学省が推奨する従来の「標準化得点*1」に加えて、教科ごとの各領域の結果分析がわかる「平均正答率*2」を用いて概要を説明します。

*1 標準化得点とは

「全国の平均的な学力」を 100 として、各市町の学力平均値を表す数値です。年度ごとで学力テストの難易度に違いはありますが、標準化得点は、常に難易度に影響されず平均的な学力が 100 となり、その上下で理解の程度を把握することができます。

*2 正答率とは

正答率は各教科の問題数あたりの正答の割合を示します。課題の難易度により正答率は大きく変動するため、前年度との比較等には適しません。このことから、紀北町では、補助的なものとして公表します。

②小学校について標準化得点で見てみると、国語は全国平均に迫り、前年度から改善しています。算数については、今年も標準化得点は 100 で全国平均を上回りました。

③中学校は、数学はコロナ禍で実施できなかった令和２年度を除いて、本年度も全国平均を上回りました。一方、国語と英語は標準化得点で前回よりも下回りました。正答率でみると、英語の「書くこと」のように全国平均を上回る領域もありますが、課題が見えた領域では自己採点で判明した課題領域の補充に取り組み、指導法の改善を始めています。

なお、英語の「話すこと」の領域は一人一台端末機を使い実施しました。全国的には各学校の ICT 環境が様々であるため、実施日時を学校ごとで大きくずらして行いました。このことから、

文部科学省も三重県教育委員会も、公平性に課題があることから、正式なデータ公表を見送っています。紀北町では「国が割り当てて初日に実施した学校の平均値」を大きく上回った学校もありますが、公平性の視点から国・県の方針に従い公表を控えます。

小学校の教科の経年変化と各教科の分析

（１）標準化得点からみる経年変化

	国語	算数
全国	１００	１００
R5 紀北町（正答率）	９９	１００
	（町 66.0、国 67.2）	（町 63.0、国 62.5）
R4 紀北町	９７	１００
R3 紀北町	９９	１００
R2 紀北町	未実施	未実施
H31 紀北町	１００	１０１

※令和２年は、新型コロナウイルス感染症拡大により実施されず。

（２）各教科の分析

① 国語

・『知識及び技能』の「言葉の特徴や使い方に関する事項」については、「日常よく使われる敬語を理解しているかどうかをみる」問題は、平均正答率が全国平均を上まわっています。一方、「情報の扱い方に関する事項」については、「原因と結果など、『情報と情報との関係』について理解しているかどうかをみる」問題は、平均正答率が全国平均を下まわり課題となっています。

・『思考力・判断力・表現力等』の「話すこと・聞くこと」については、「目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる」問題では、平均正答率が全国平均を上まわり、成果がみられます。
「読むこと」については、「目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる」問題について課題がみられます。
「書くこと」については、「図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる」問題で、平均正答率が全国平均を上まわっており、成果がみられます。
令和４年度には課題がみられた記述式の問題について、いずれも平均正答率が全国平均を上まわり、取組の成果がみられます。

② 算数

・「数と計算」、「図形」、「データの活用」の３つの領域で平均正答率が全国平均を上まわっています。

・「数と計算」の領域については、６問中５問で平均正答率が全国平均を上まわっており、特に「一の位が０の二つの２位数について、乗法の計算をすることができるかどうかをみる」問題に成果がみられます。一方、「（２位数）÷（１位数）の筆算について、図を基に、各段階の商の意味を考えることができるかどうかをみる」問題で、平均正答率が全国平均を下まわっており、正答である選択肢２を選んでいる児童と同程度の割合で誤答である選択肢３を選んでいます。選択肢３を選んだ児童は、筆算と式を関連付けて考えることができずに、商が２になる６÷３に着目して選択したことが考えられます。
・「変化と関係」の領域については、「伴って変わる二つの数量について、比例の関係ではないことを説明するために、表の中の適切な数の組を用いることができるかどうかをみる」問題は、平均正答率が全国平均を上まわり、経年課題であった関数が改善しています。一方、「百分率で表された割合について理解しているかどうかをみる」問題で課題がみられます。
・「データの活用」の領域については、「示された棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み、見いだした違いを言葉と数を用いて記述できるかどうかをみる」問題は、平均正答率が全国平均を上まわっていますが、「二次元の表から、条件に合う数を読み取ることができるかどうかをみる」問題については、課題がみられます。
・「図形」の領域については、「正方形の意味や性質について理解しているかどうかをみる」問題で平均正答率が全国平均を上まわっています。
・記述式の問題については、令和４年度に比べ、全国平均との差が縮まり、改善しました。

中学校の教科の経年変化と各教科の分析

（１）標準化得点からみる経年変化

	国語	数学	英語
全国	１００	１００	１００
R5 紀北町（正答率）	９６	１０１	９８
	（町 61.0、国 69.8）	（町 53.0、国 51.0）	（町 41.0、国 45.6）
R4 紀北町	９９	１０１	
R3 紀北町	９６	１０１	
R2 紀北町	未実施	未実施	
H31 紀北町	９８	１０２	１００

※令和２年は、新型コロナウイルス感染症拡大により実施されず。

（２）各教科の分析

① 国語

・『知識及び技能』の「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、「文脈に即して漢字を正しく書くことができるかどうかをみる」問題、「情報の扱い方に関する事項」では、「具体と抽象など情報と情報との関係について理解しているかどうかをみる」問題、「我が国の言語文化に関する事項」

では、「古典の原文と現代語の文章とを対応させて内容を捉えることができるかどうかをみる」問題で、平均正答率が全国平均を大きく下まわっており、課題がみられます。

・『思考力・判断力・表現力等』の「話すこと・聞くこと」については、昨年度に比べ０．７ポイント改善しましたが、「目的や場面に応じて質問する内容を検討することができるかどうかをみる」問題では、平均正答率が全国平均を下まわり、課題がみられます。

・「書くこと」については、「読み手の立場に立って、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる」問題で、平均正答率が全国平均を下まわり、課題がみられます。解答の特徴として、正答である「調べることにした理由を明確にしようとした」を選択せずに、誤答である「興味をもったきっかけを明確にしようとした」を選択した生徒が、全国平均よりも＋９．１ポイント多くみられました。

・「読むこと」については、「文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる」問題では、平均正答率が全国平均を大きく下まわり、課題がみられます。

記述式の問題については、４問中のすべてにおいて、平均正答率が全国平均を下まわり、課題となっています。

② 数学

・「数と式」の領域については、平均正答率が全国平均を上まわり、成果が見られます。特に、「自然数の意味を理解しているかどうかみる」問題で、平均正答率が全国平均を上まわっています。

・「図形」の領域については、平均正答率が全国平均を上まわり、成果が見られます。特に、「ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができるかどうかをみる」問題、「条件を変えた場合に事柄が成り立たなくなった理由を、証明を振り返って読み取ることができるかどうかをみる」問題で成果が見られます。一方、「空間における平面が同一直線上にない３点で決定されることを理解しているかどうかをみる」問題で、平均正答率が全国平均を下回っており、課題がみられます。

・「関数」の領域については、「与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ることができるかどうかをみる」問題で、平均正答率が全国平均を上まわっています。「事象を理想化・単純化することで表された直線のグラフを、事象に即して解釈することができるかどうかをみる」問題で、平均正答率が全国平均を下まわり、課題が見られます。

・「データの活用」の領域については、「四分位範囲の意味を理解しているかどうかをみる」問題で、平均正答率が全国平均を上まわり、成果がみられます。「複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる」問題で平均正答率が全国平均を下まわっており、データを用いた表現力を高めることを目標に課題解決に取り組みます。

③ 英語

・「書くこと」の領域については、平均正答率が全国平均を上まわりました。特に、「日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書くことができるかどうか

をみる」問題で、平均正答率が全校平均を下まわっています。

・「聞くこと」の領域については、平均正答率が全国平均を下まわりました。特に「情報を正確に聞き取ることができるかどうかをみる」問題、「日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断して、必要な情報を聞き取ることができるかどうかをみる」では、平均正答率が全国平均を下まわっています。

・「読むこと」の領域については、「日常的な話題について、短い文章の概要を捉えることができるかどうかをみる」問題で、平均正答率が全校平均を上まわりました。一方、「文と文との関係を正確に読み取ることができるかどうかをみる」問題、「社会的な話題について、短い文章の要点を捉えることができるかどうかをみる」問題では、平均正答率が全国平均を下まわっています。記述式の問題については、全体的に平均正答率が全国平均を上まわり、成果がみられます。

（３）無解答率について

①　小学校

	国　語	算　数
平均無回答率	１．０（－３．８）	１．１（－２．３）

※表中の（　）の数値は、全国の平均無解答率との差を示しています。

・小学校国語・算数は、全国の平均無解答率を下まわり、最後まで解答を書こうと努力できる粘り強さが認められます。

・令和４年度に認められた「記述式の問題の無解答率」が高いという課題については、授業改善に取り組んだ結果、国語、算数ともに「記述式の問題の無回答率」が全国を下まわり、成果がみられました。

・学びに取り組む姿勢の確からしさが、結果を引き上げています。

②　中学校

	国　語	数　学	英　語
平均無回答率	６．３（＋１．７）	９．０（－０．６）	４．９（－０．８）

・中学校国語と数学の記述式の課題については、設問を意識して長い問題文を読み取るのに時間がかかり、結果として題意を読み取るために時間を必要として平均無回答率と記述式平均無回答率が全国よりも高く課題となっています。

・一方で、数学と英語において、平均無解答率が全国の平均を下まわり、最後まで解答を書こうと努力する粘り強さが高まっていると認められます。数学と英語は記述式平均無回答率は比較的高いレベルにあり、英語は全国平均を下回り、数学は上回っていますが、自分の考えをまとめ、対話を通して深める授業の精度を高める授業づくりの精度をもう一段高めることが課題となっています。

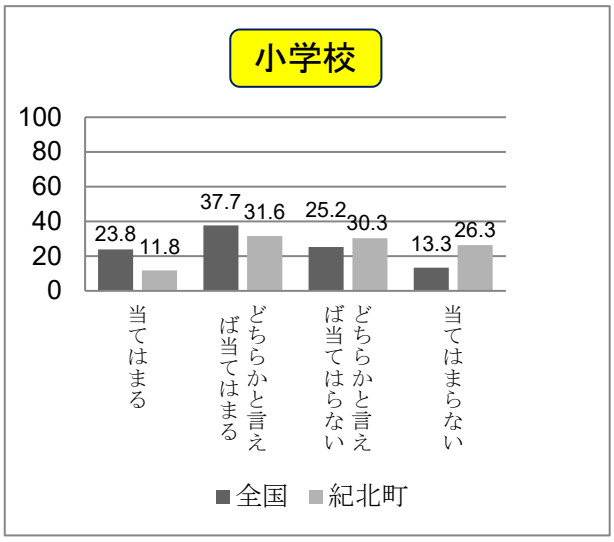
3　児童生徒質問紙調査結果の特徴的な傾向

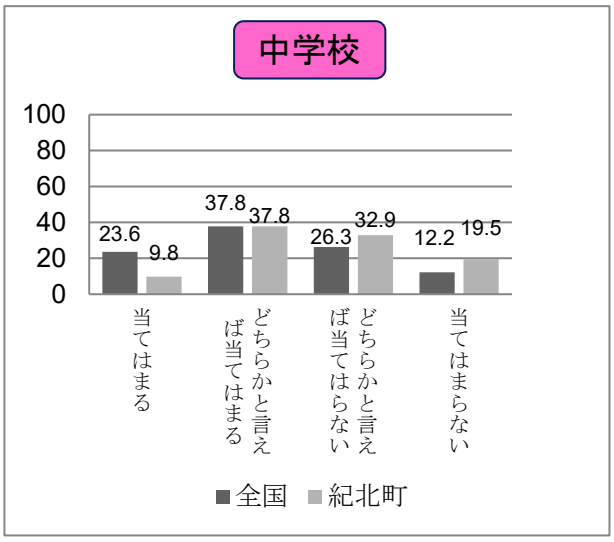
「児童生徒質問紙調査」とは、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査です。ここでは、「児童生徒質問紙調査」のうち、特徴的な資料をいくつか示し、その傾向と分析を記載します。

（１）学校教育に関する特徴的なこと

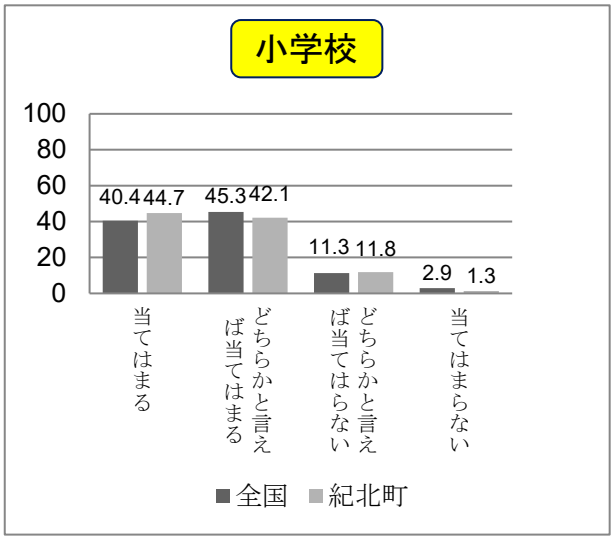
- 「国語、算数・数学の勉強は好きですか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と答えた児童生徒の割合は、算数・数学では、小学校は全国より低く、中学校は全国より高いです。国語は小学校、中学校とも全国より低いです。
- 「英語の勉強は好きですか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と答えた児童生徒の割合は、小学校、中学校とも全国より高いです。
- 「国語、算数・数学の授業の内容はよく分かりますか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と答えた児童生徒の割合は、算数・数学は小学校、中学校とも全国より高く、国語は小学校は全国より高く、中学校は全国より低いです。
- 「英語の勉強は大切だと思いますか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と答えた児童生徒の割合は、小学校は全国より高く、中学校は全国より低いです。
- 「国語、算数・数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と答えた児童生徒の割合は、国語では、小学校は全国より高く、中学校は全国より低いです。算数・数学では、小学校、中学校とも全国より高いです。
- 「将来、積極的に英語を使うような生活をしたり職業に就いたりしたいと思いますか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と答えた児童生徒の割合は、小学校、中学校とも全国より高いです。
- 「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学校は全国より低く、中学校は全国より高いです。
- 「自分にはよいところがあると思いますか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまると回答した児童生徒の割合は、小学校は全国より低く、中学校は全国より高いです。
- 「友達関係に満足していますか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学校は全国より低く、中学校は全国より高いです。
- 「将来の夢や目標を持っていますか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学校は全国より低く、中学校は全国より高いです。
- 「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学校は全国より高く、中学校は全国より低いです。
- 「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学校、中学校とも全国より高いです。

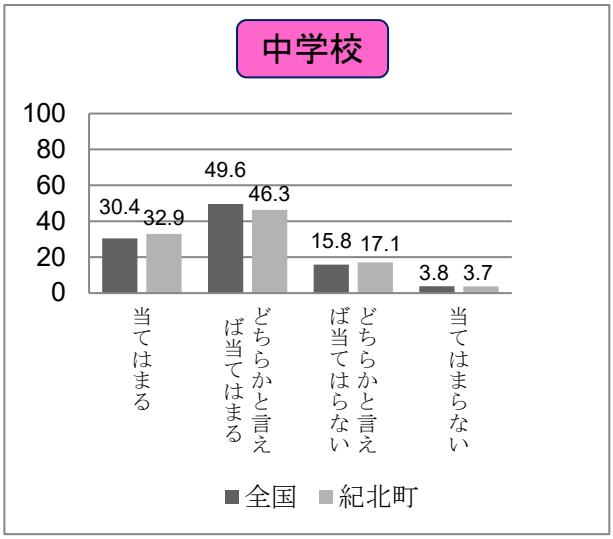
①国語の勉強は好きですか。



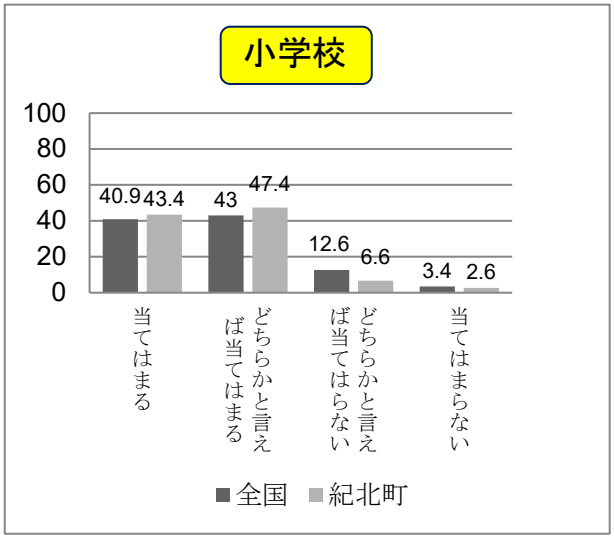


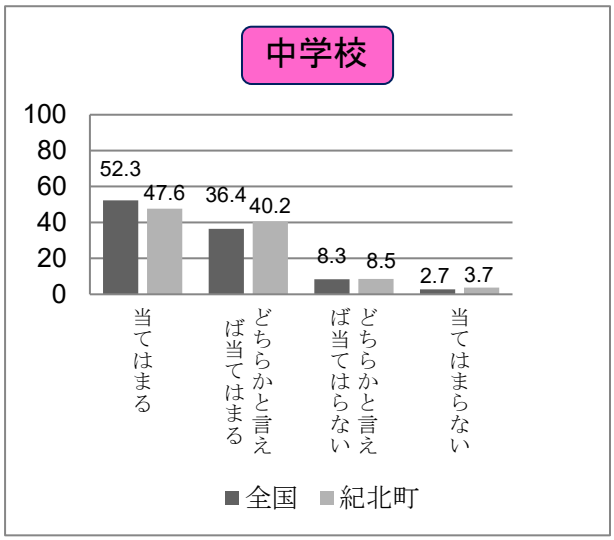
②国語の授業内容はよく分かりますか。



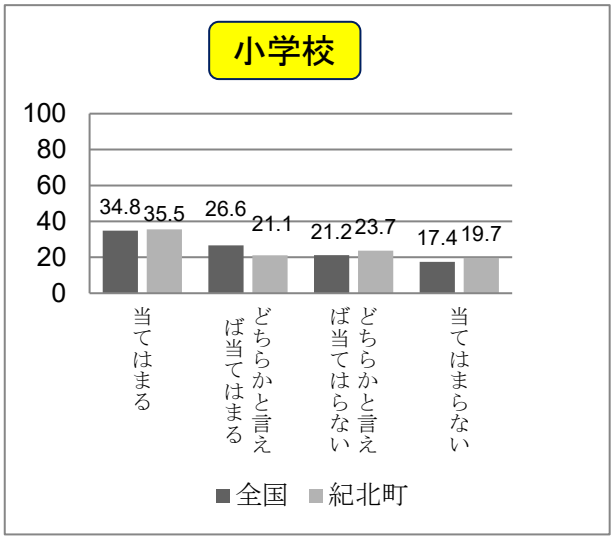


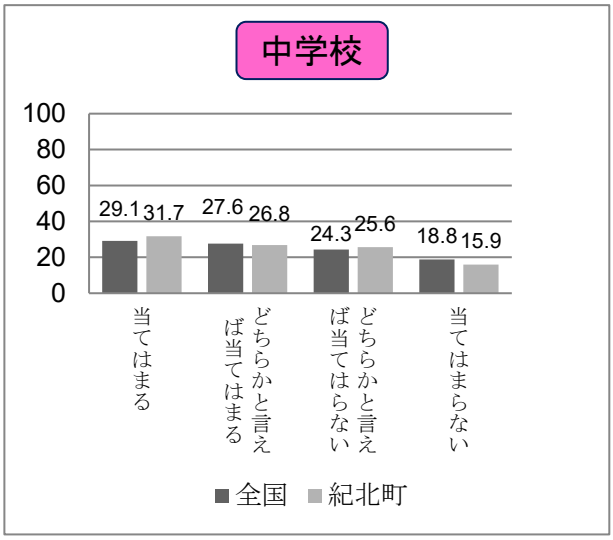
③国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。



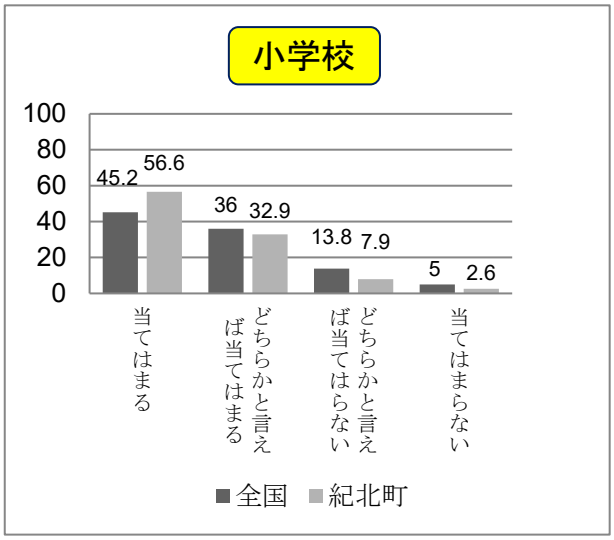


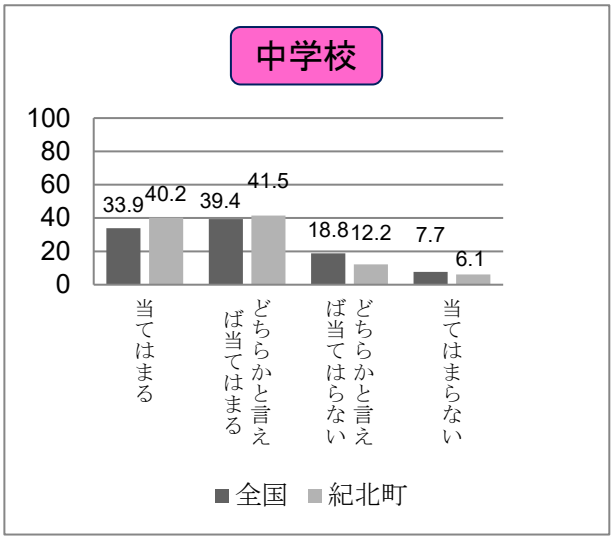
④算数・数学の勉強は好きですか。



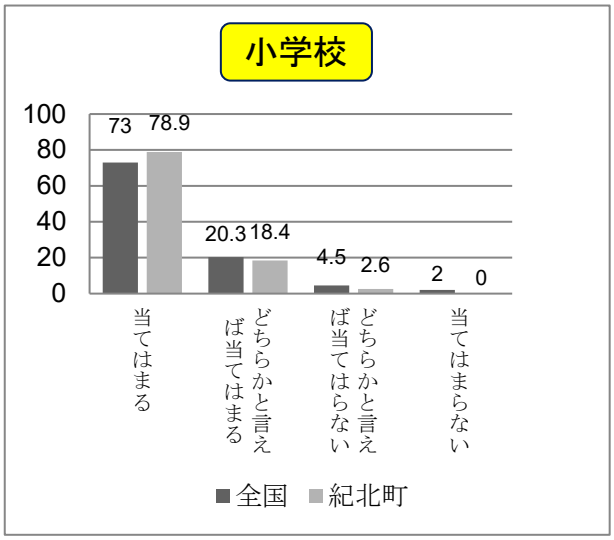


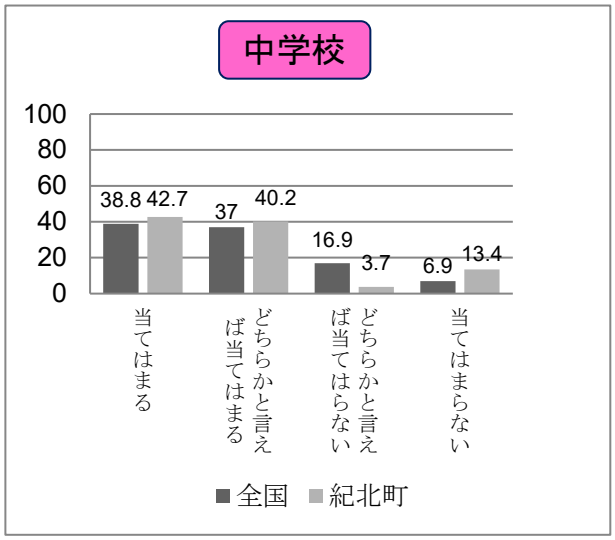
⑤算数・数学の授業内容はよく分かりますか。



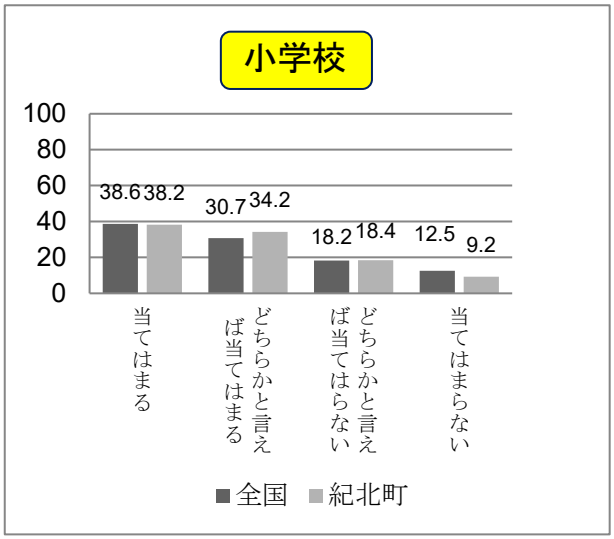


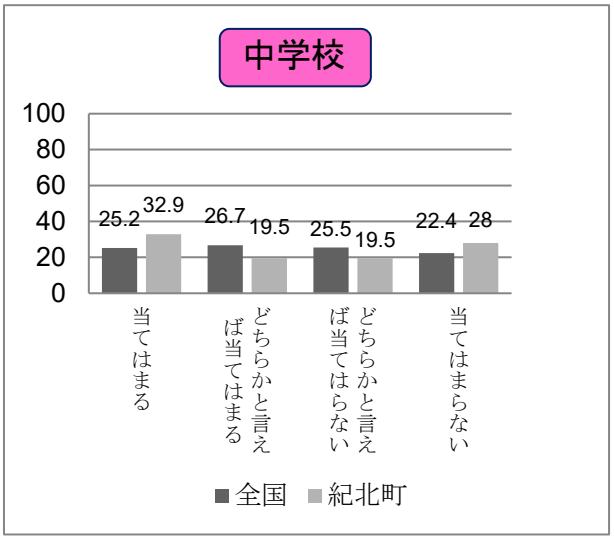
⑥算数・数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。



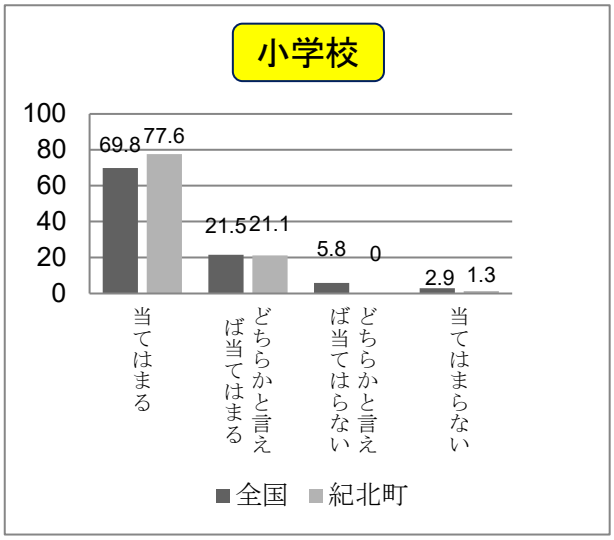


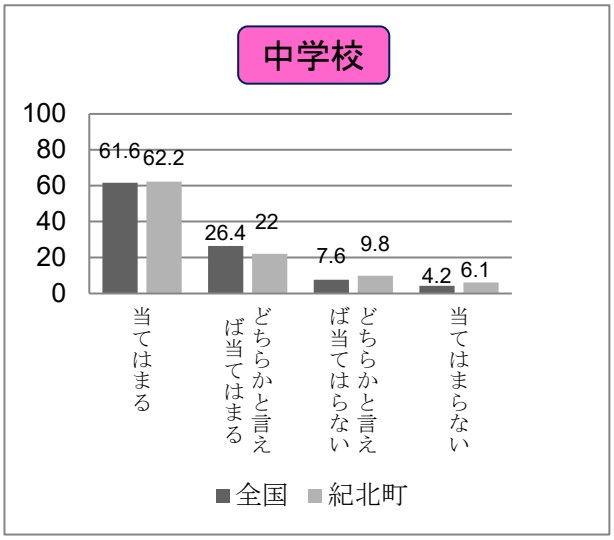
⑦英語の勉強は好きですか。



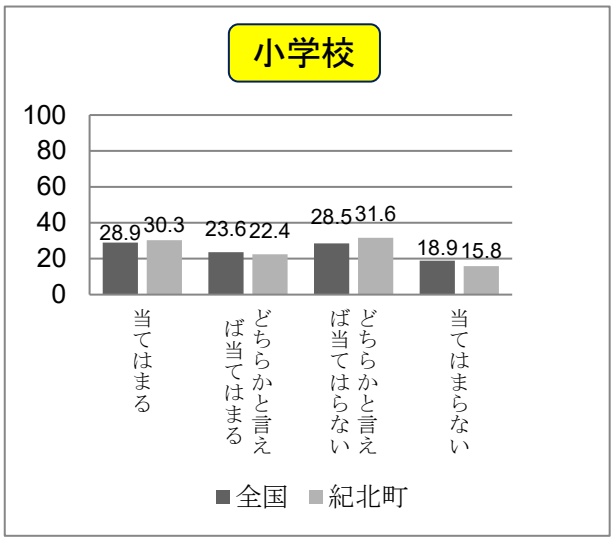


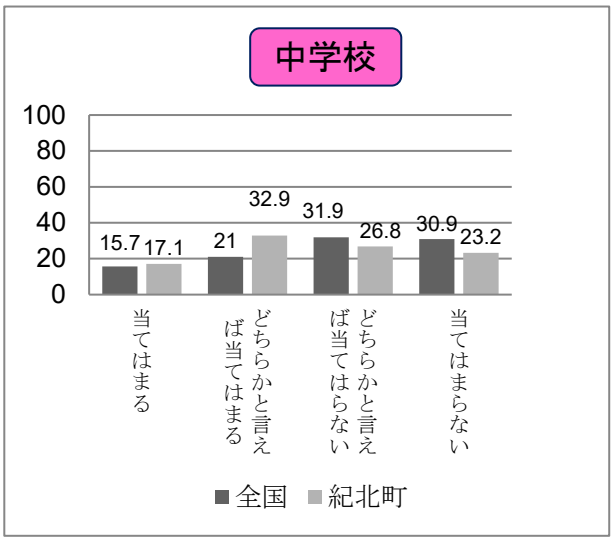
⑧英語の勉強は大切だと思いますか。



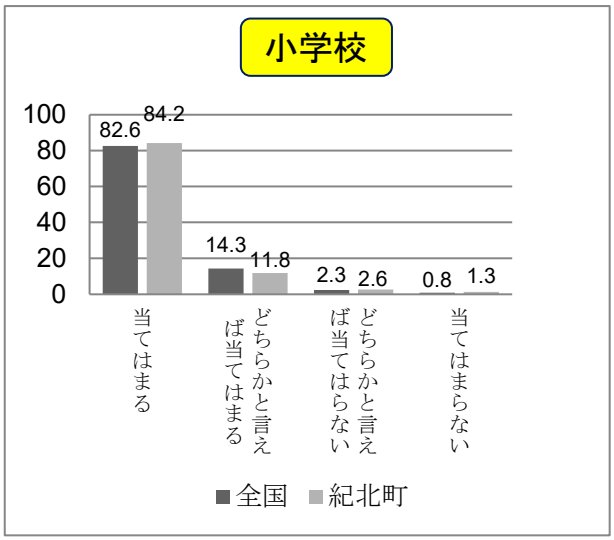


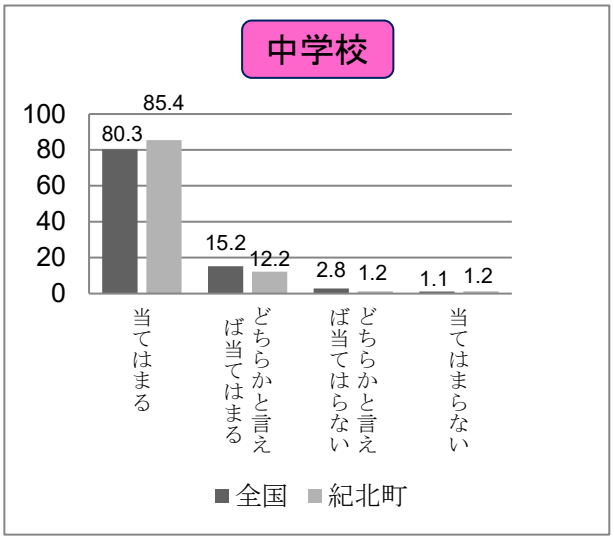
⑨将来、積極的に英語を使うような生活をしたり職業に就いたりしたいと思いますか。



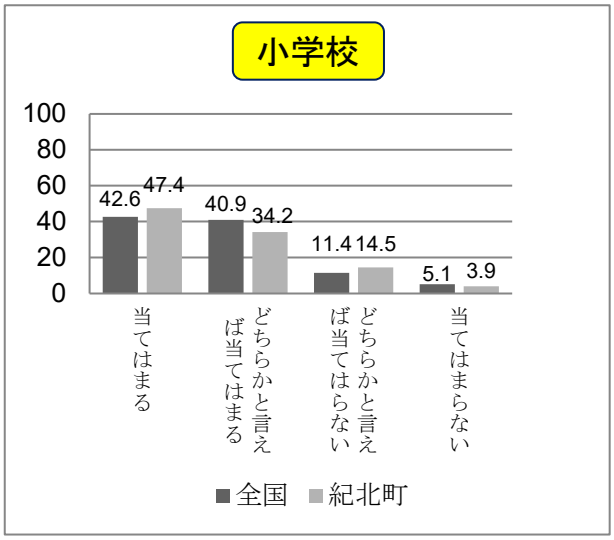


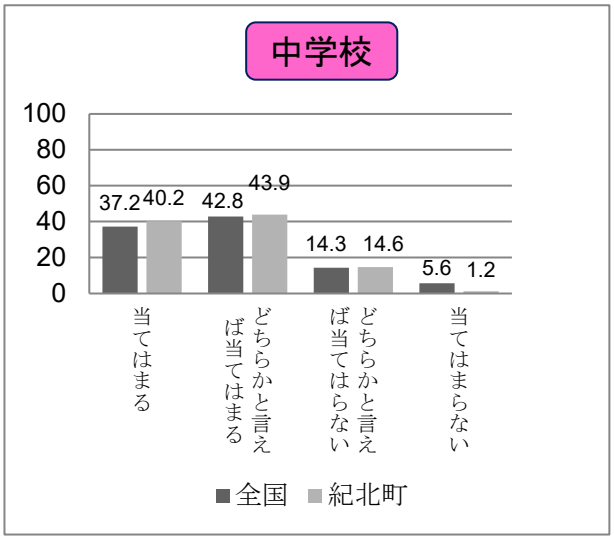
⑩いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。



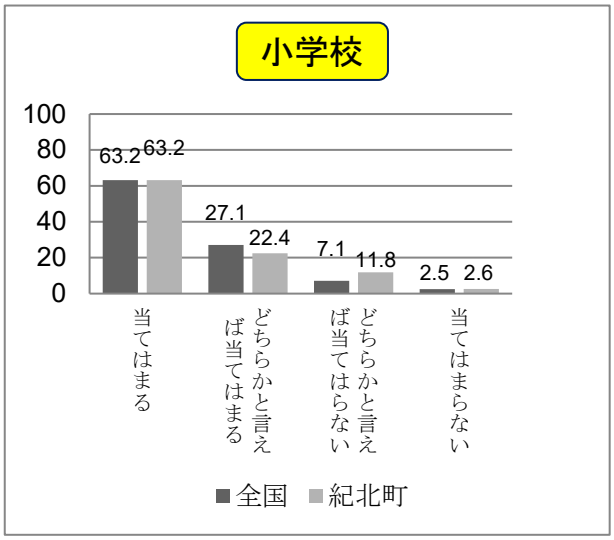


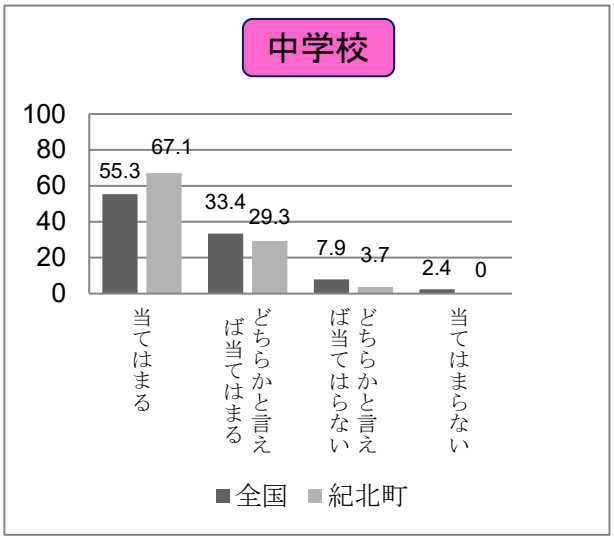
⑪自分には、よいところがあると思いますか。



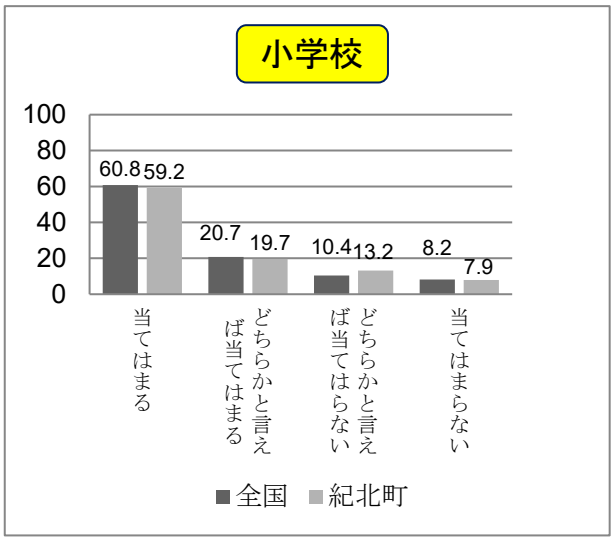


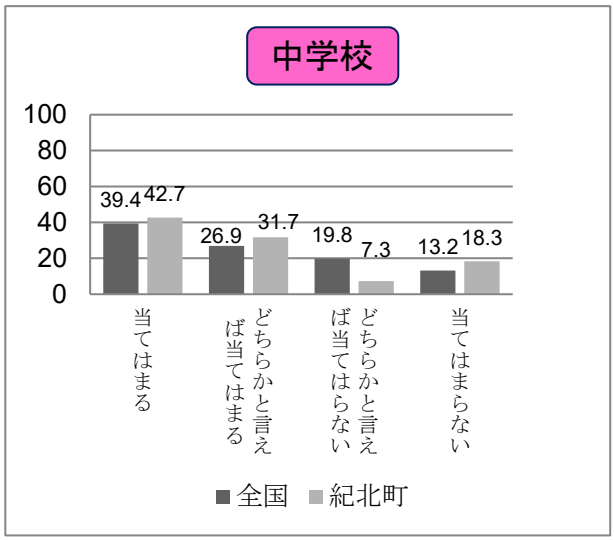
⑫友達関係に満足していますか。



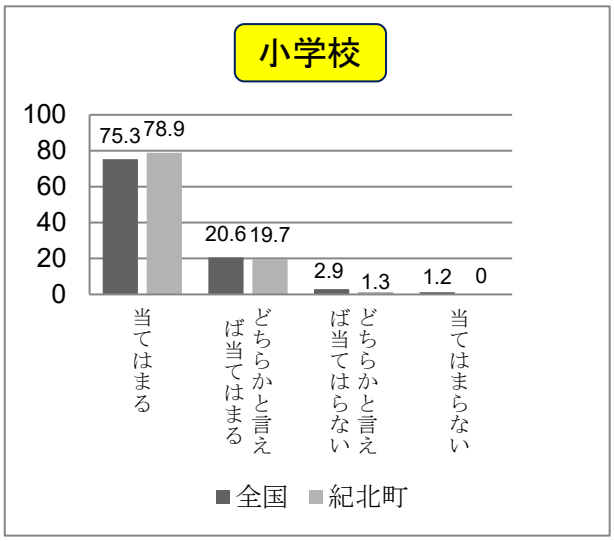


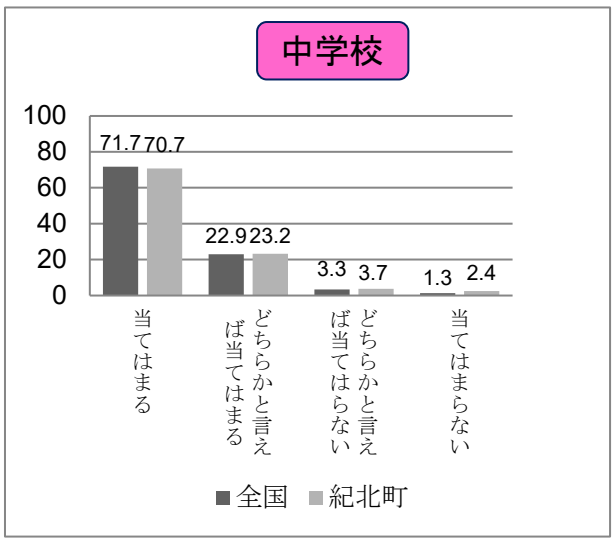
⑬将来の夢や目標を持っていますか。



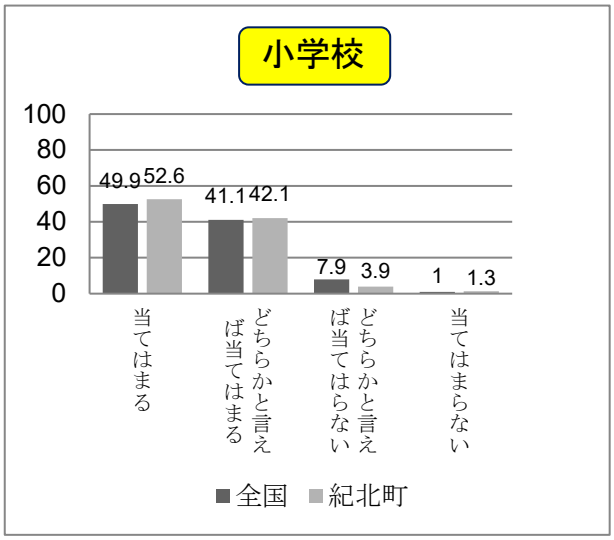


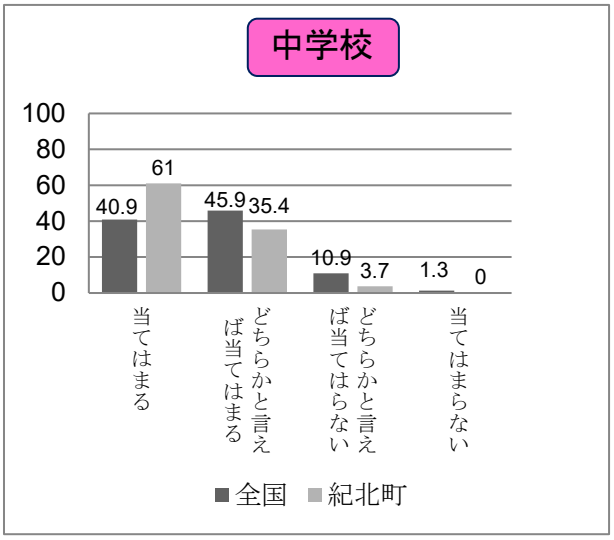
⑭人の役に立つ人間になりたいと思いますか。





⑮普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか。





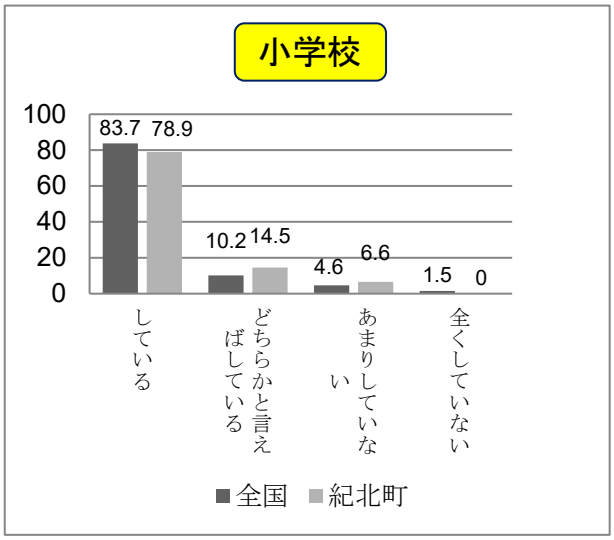
（２）基本的生活習慣で特徴的なこと

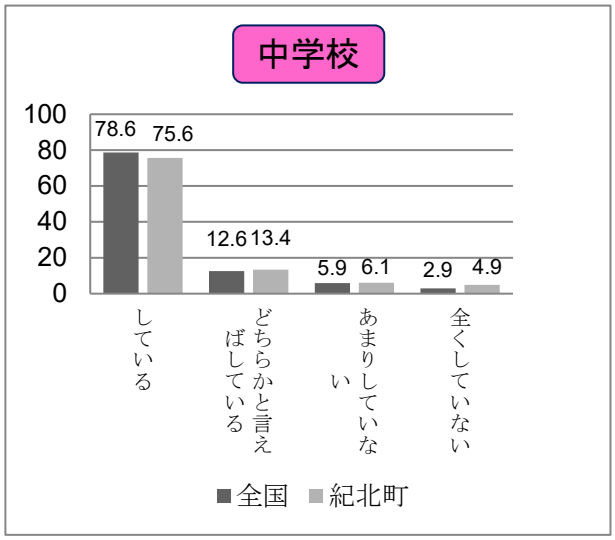
●「朝食を毎日食べていますか」に対して、「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、小学校は全国とほぼ同じ、中学校は全国より低いです。中学校については、食べている割合が一時下がりましたが、改善傾向にあります。引き続き、小学校、中学校ともに改善を呼びかけていきます。

●「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」に対して、「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、小学校は低く、中学校は全国より高いです。

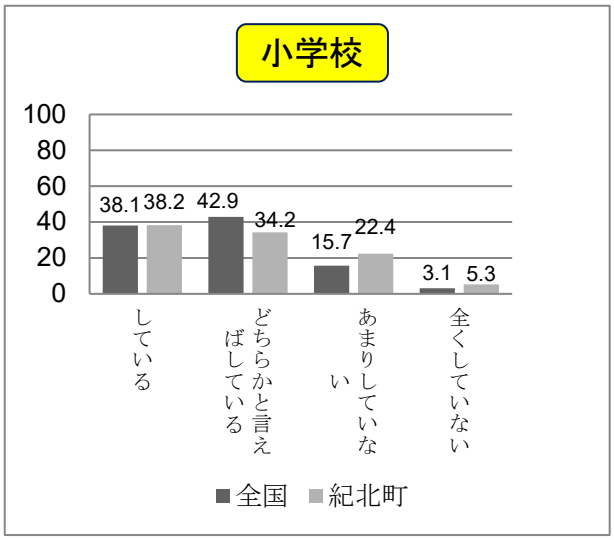
●「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」に対して、「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、小学校は全国より低く、中学校は全国より高いです。

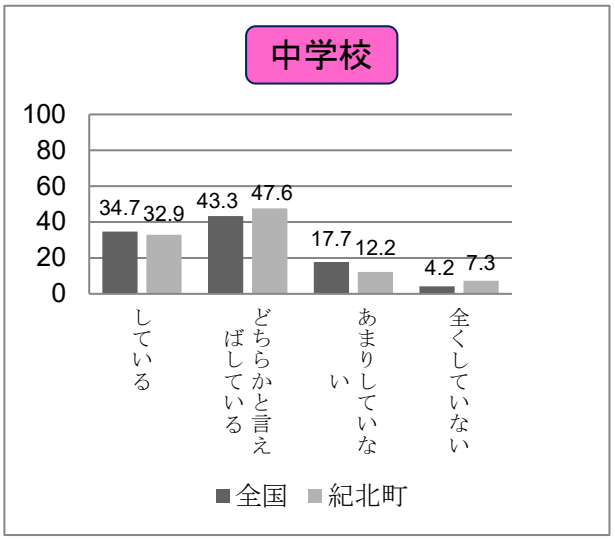
①朝食を毎日食べていますか。



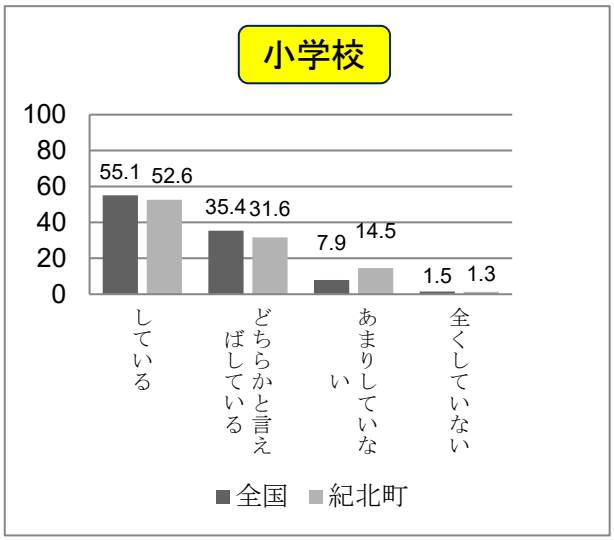


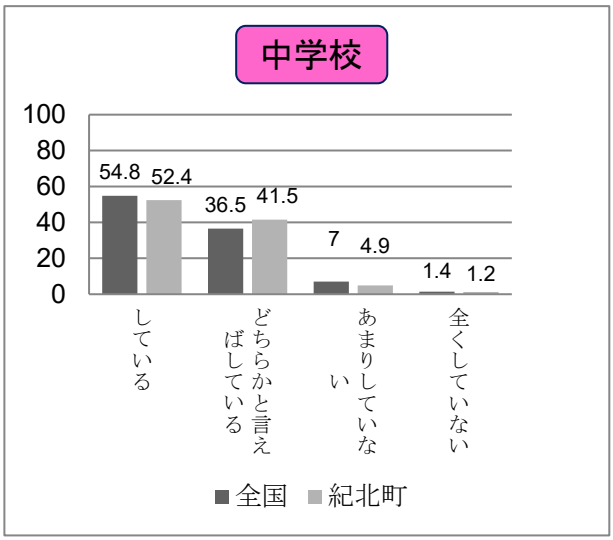
②毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか。





③毎日、同じくらいの時刻に起きていますか。





（３）家庭学習で特徴的なこと

●家で、自分で計画を立てて勉強をしている児童生徒の割合は、小学校は全国より低く、中学校は全国とほぼ同じです。

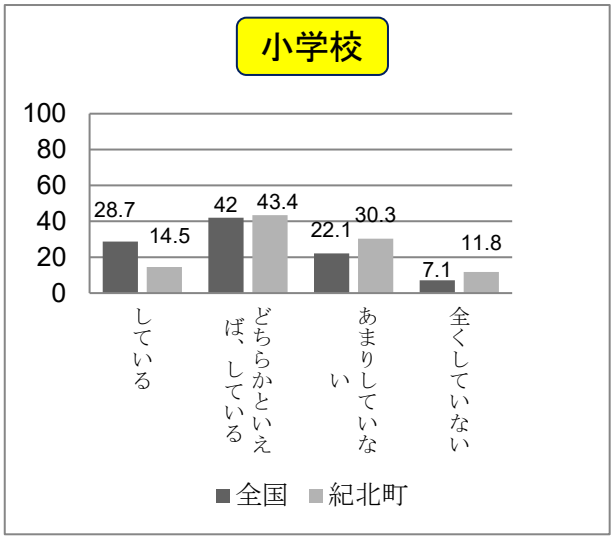
●学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）２時間以上勉強する児童生徒の割合は、小学校は全国より低く、中学校は全国より高いです。

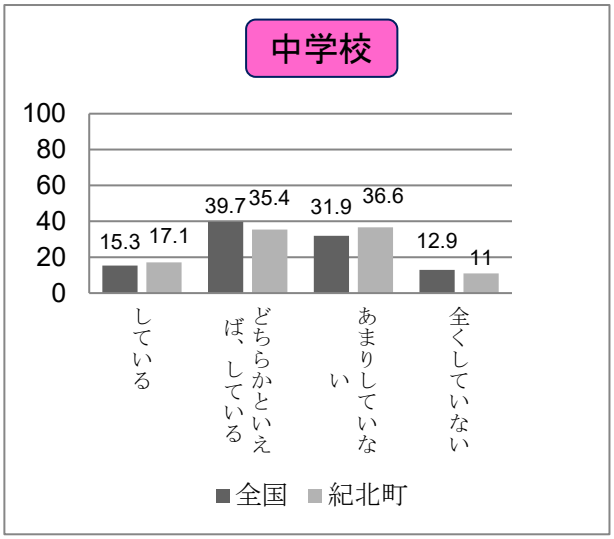
●小学校も中学校も、普段（月曜日から金曜日）１日当たり読書する時間が、全国より短いです。読書習慣をつけるために、積極的な図書館利用の取組、読書タイム、家読（うちどく）などを推進し、読書時間の向上に取り組んでいきます。

●新聞をほとんど、または、全く読まない児童生徒の割合は、小学校、中学校とも全国より低いです。

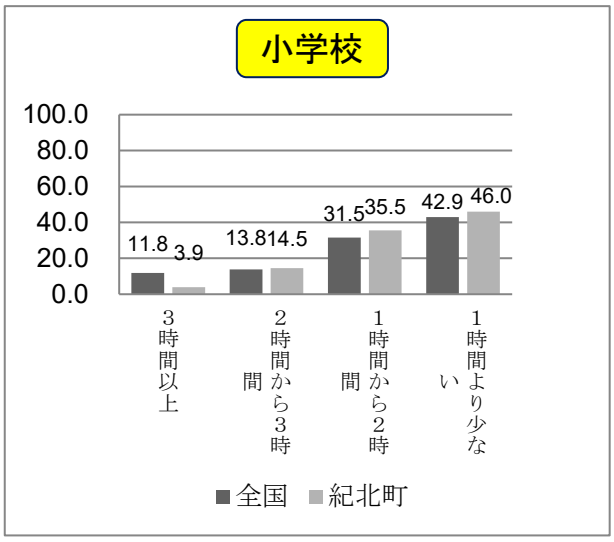
●読書が好きな児童生徒の割合は、小学校、中学校とも全国より低いです。

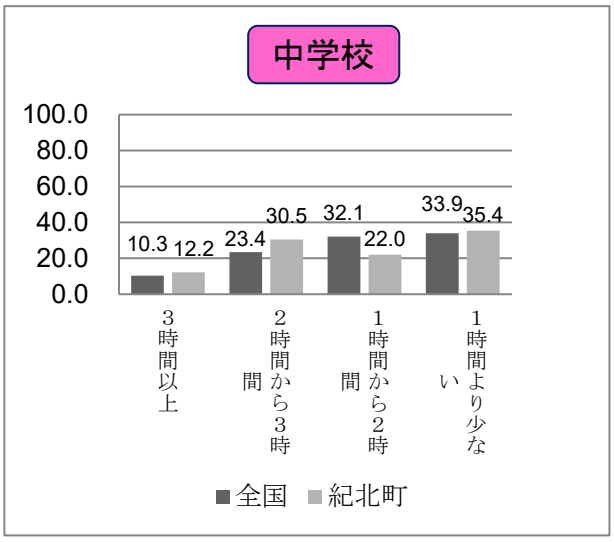
①家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか。



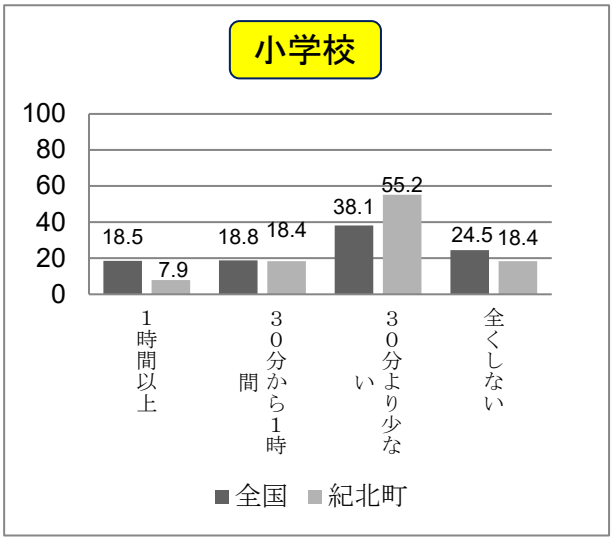


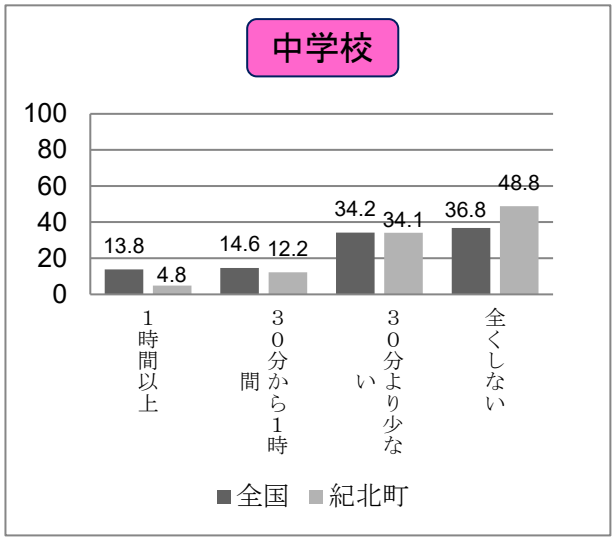
②学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。



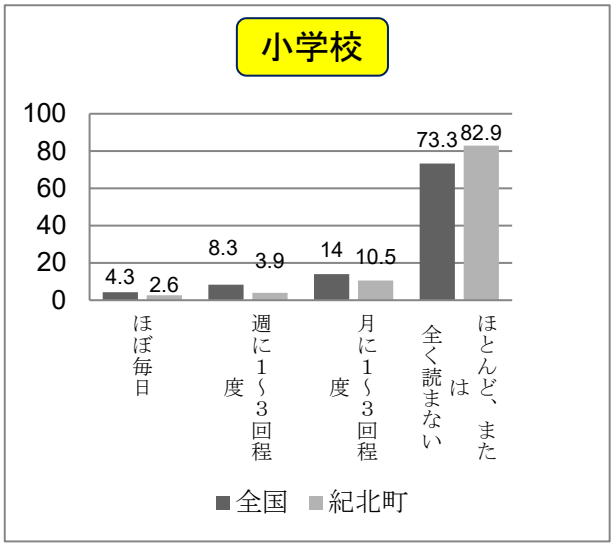


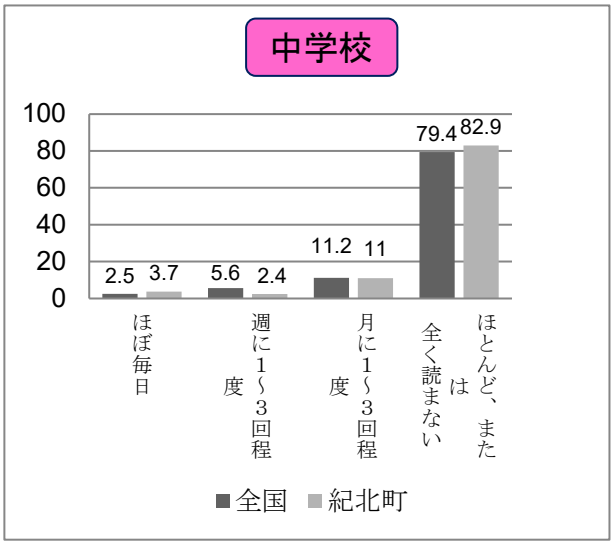
③学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、読書をしますか。



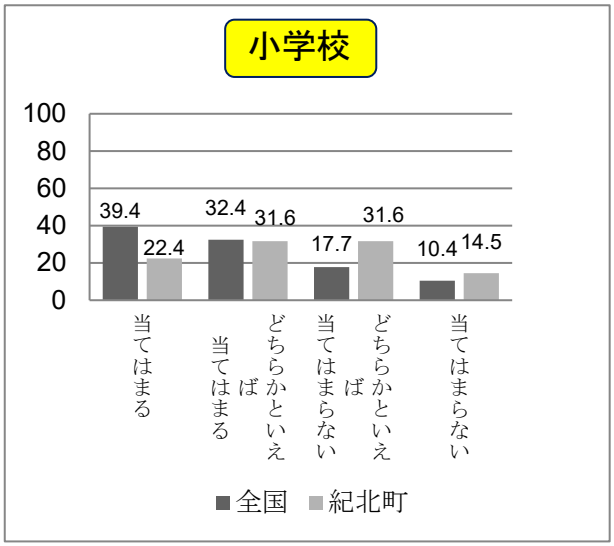


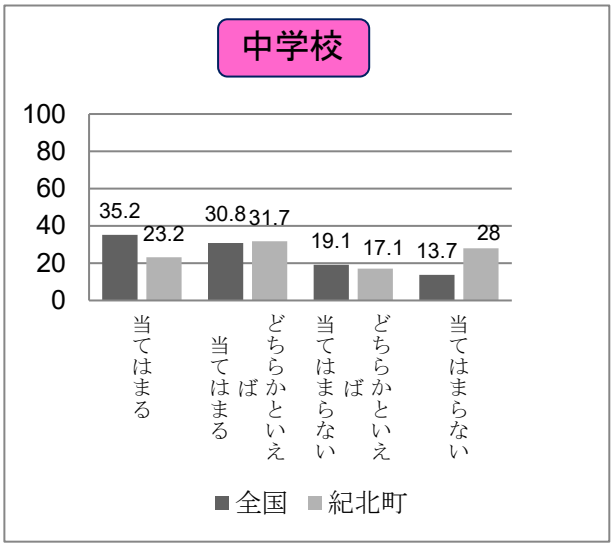
④新聞を読んでいますか。





⑤読書は好きですか。



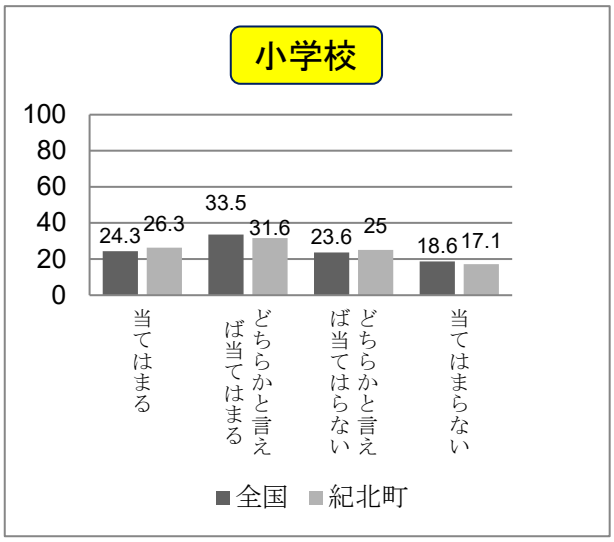


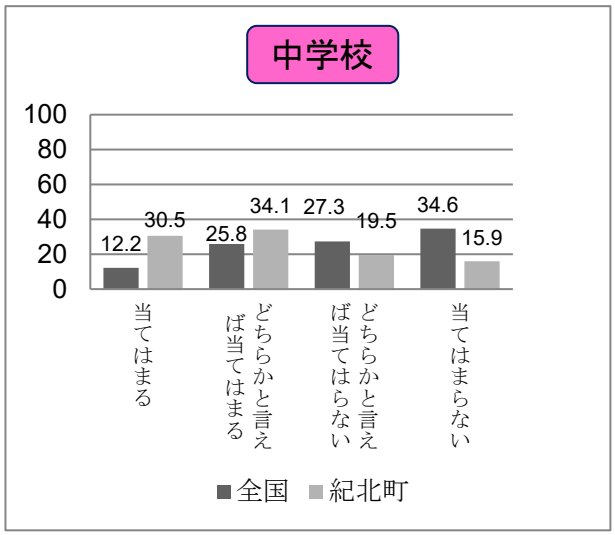
（４）地域貢献・社会貢献で特徴的なこと

●今住んでいる地域の行事に参加している児童生徒の割合は、小学校、中学校とも全国より高いです。

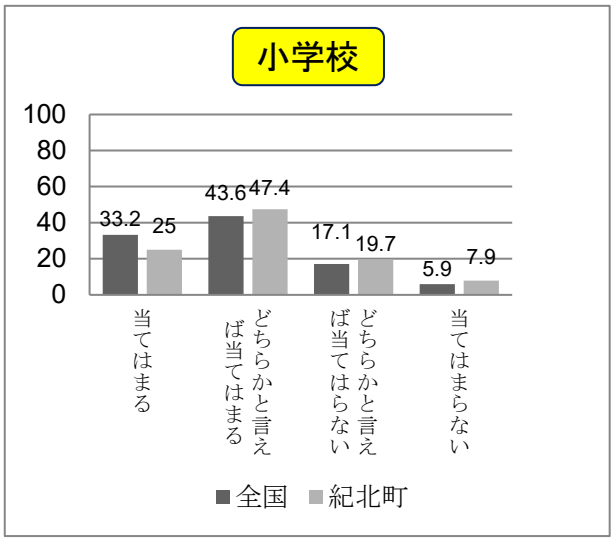
●地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う児童生徒の割合は、小学校は全国より低く、中学校は全国より高いです。

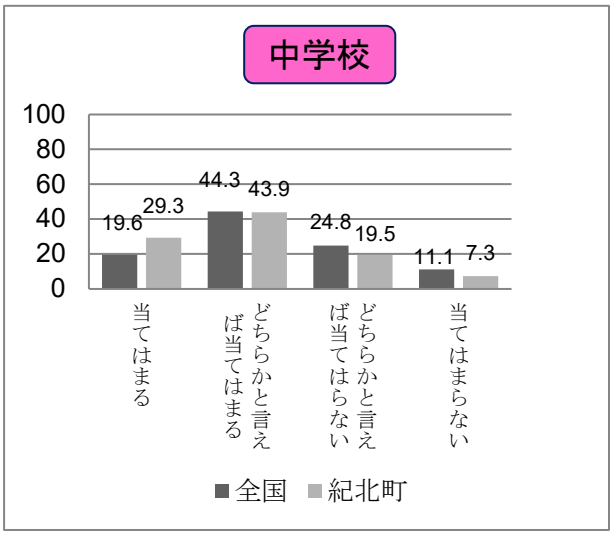
①今住んでいる地域の行事に参加していますか。





②地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。





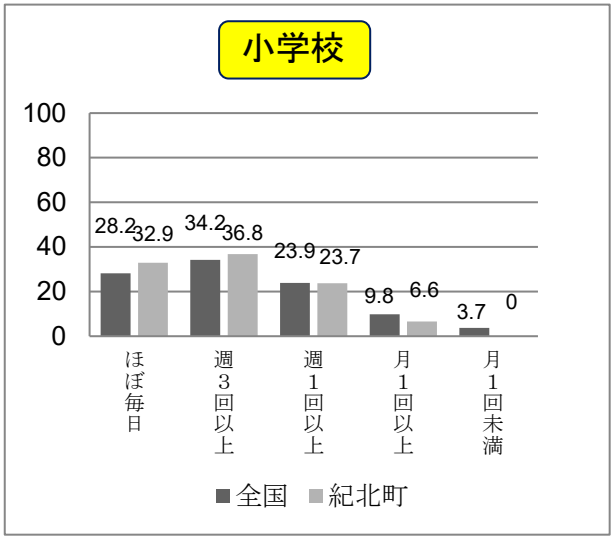
（５）ＩＣＴ機器の活用について

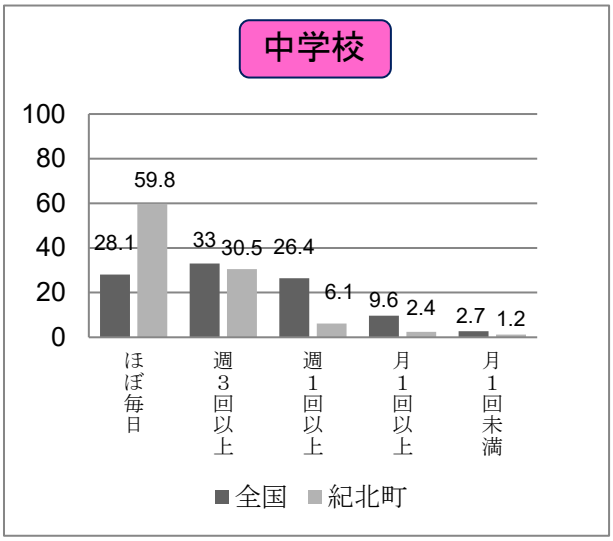
●学校で、授業で、ＰＣ・タブレットなどのＩＣＴ機器を使う割合は、小学校、中学校とも全国より高いです。

●学習の中でＰＣ・タブレットなどのＩＣＴ機器を使うのは勉強の役に立つと考える児童生徒の割合は、小学校、中学校とも全国より低いです。

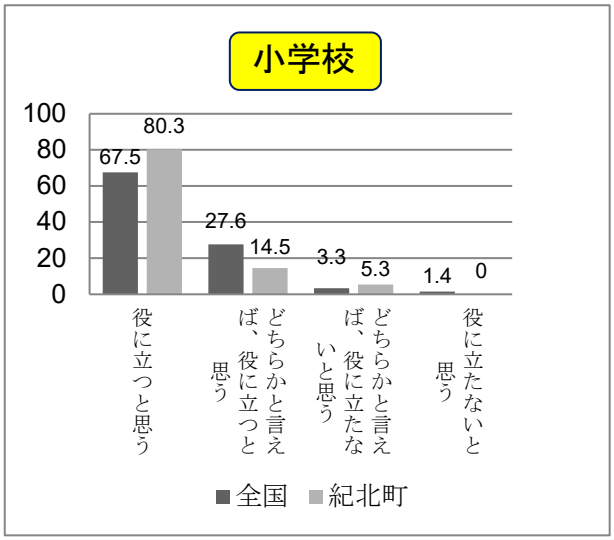
●学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、ＰＣ・タブレットなどのＩＣＴ機器を、勉強のために使ってる児童生徒の割合は、小学校は全国より低く、中学校は全国より高いです。

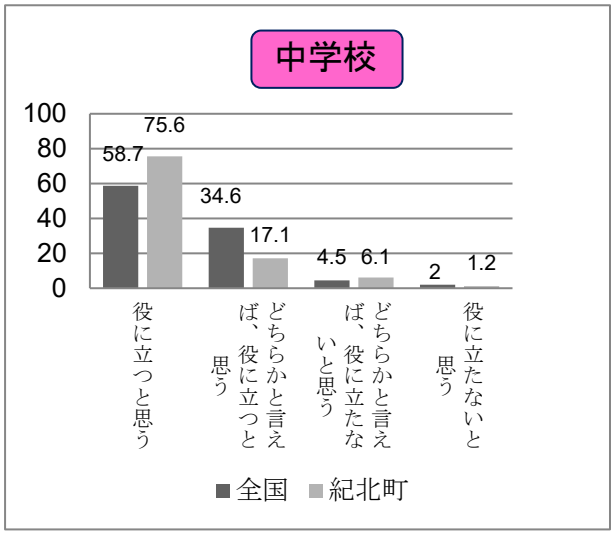
①授業で、ＰＣ・タブレットなどのＩＣＴ機器を、どの程度使用しましたか。



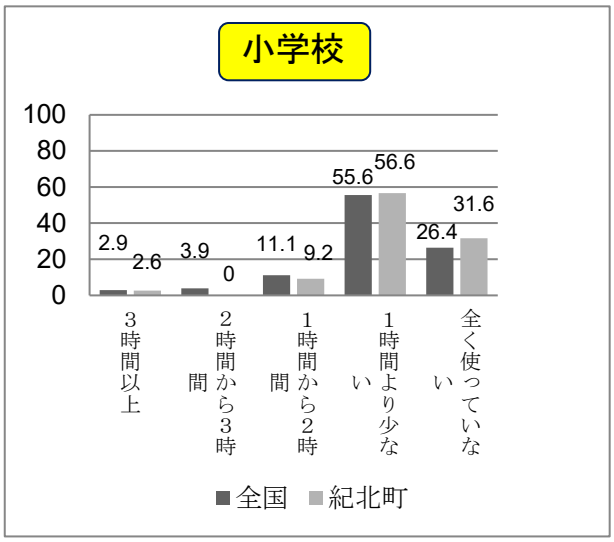


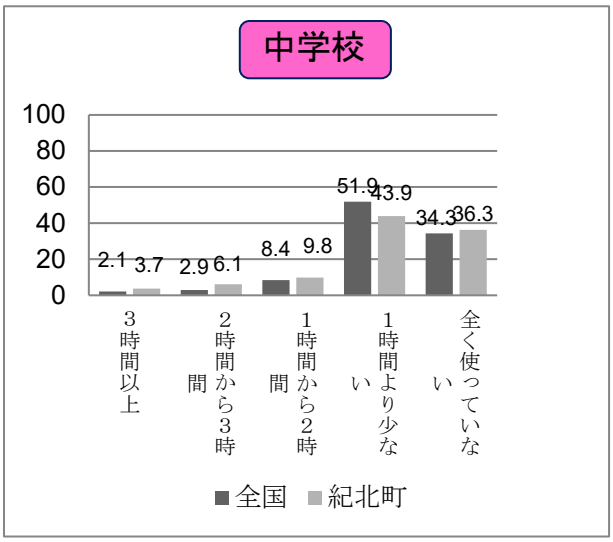
②学習の中でＰＣ・タブレットなどのＩＣＴ機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか。





③学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、ＰＣ・タブレットなどのＩＣＴ機器を、勉強のために使っていますか。





4　学校質問紙調査結果の特徴的な傾向

「学校質問紙調査」とは、学校における指導方法に関する取組や、学校における人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査です。ここでは、「学校質問紙調査」のうち、肯定的に回答したものの特徴的な傾向と、改善すべき課題を記載します。

肯定的な回答の特徴的な傾向

●児童生徒は一人ひとりごとで理解の仕方が異なることから、小学校入学時から一人一人の特性や学級集団の特性の理解に努めて、教職員間で積極的に情報の共有を図り切れ目のない指導と支援を行っています。

●調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせるキャリア教育指導を行っています。今回の調査の時点では反映されていませんが、5 月 8 日以降感染防止対策が緩和されて各校共に積極的に体験学習を取り入れており、学びへの関心や意欲の高まりが期待されます。

●調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、学習指導において、児童生徒一人一人に応じた、個別最適化された学習課題や活動の工夫を進めています。

●調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、授業において、児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を学ぶ校内研修を行っています。

●調査対象学年の児童に対する指導に関して、前年度に、本やインターネット、図書館資料などを活用した授業を計画的に行っています。

●教員がコンピュータなどの ICT 機器の使い方を学ぶために必要な研修機会があります。

●調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、家庭学習の課題の課し方について、校内の教職員で共通理解を図っています。

●令和４年度全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために 活用しています。

改善が必要な回答

一方、以下の項目でＩＣＴ機器の活用が、月１回程度の使用に留まっている実態が見られます。

●家庭学習の課題（宿題）として、児童にＰＣ・タブレットなどのＩＣＴ機器を使用して、英語の学習をどの程度行わせているか。

●児童生徒一人一人に配備されたＰＣ・タブレットなどの端末を、どの程度家庭で利用できるようにしているか。

本年度の方針として、端末の家庭持ち帰りを中学校から小学校にも適用し、長期休業中や週末の持ち帰りに拡大して取り組んでいます。

5　町教育委員会における本年度の取組

（１）大切にする３つのポイント

①「生涯にわたり学び続ける力（学力)」を育成する授業改善

・技術革新が連続する社会にあって、紀北町教育委員会は児童生徒に、「生涯にわたり学び続ける力」となる学力を育むことに取り組みます。

・その学力を定着させるには、「どうしてなんだろう」、「なぜ何だろう」という興味が持てる授業づくりが基本であり、その中で「わかった」、「できた」という喜びを実感できる振り返りが大切です。そうした体験に出会うとき、子どもたちは学ぶ意欲を高め、意欲的に学び始めます。

・この豊かな学びが定着するように、授業は「めあて・振り返り」を大切にして、「主体的・対話

的で深い学び」を実現する授業改善に取り組んでいます。

② 「活用する力」の育成
・学校における学びは基礎的・基本的な知識・技能を身につけることがゴールではなく、学んだ知識・技能を基盤として「活用する力」の育成を図ります。
・それが、授業における「発展な学び」であり、「協働的な課題解決学習」につながります。「何を知っているのか」で立ち止まることなく、「何ができるのか」をめざして、学びを発展させる中で「生涯にわたり学び続ける力」を育みます。

③ スクリーンタイムの削減と、読書や運動のすすめ
・コロナウイルス感染症が拡大した令和元年度末以降、児童生徒がゲーム機やスマートフォンの利用する時間であるスクリーンタイムが増えている実態があるため、依存傾向が強まらないか懸念しています。
・この問題は子どもだけでは解決しにくい課題であるため、家族との連携をお願いしているところです。家族読書や運動機会が増えたとの報告も届いてきました。引き続き、呼びかけを行います。
・現代社会において、入試出願などパソコンやスマートフォンの利用が無くなることはありえません。無くすのではなく、目的に応じた節度ある利活用が必要です。
家庭・学校・社会が連携して、子どもたちのスクリーンタイム依存問題の解決に取り組みます。

（２）学力向上委員会の活動

各学校における家庭学習の充実や授業改善に資するよう、町全体としての課題について共通理解を図るとともに、学力向上の方策について検討します。また各中学校区での授業実践交流を行い、教職員の実践力、授業力の向上を図ります。

保護者と連携し、子どもたちの家庭学習の実態、生活習慣、読書等を把握し、成果と課題について共通理解を図るとともに家庭学習の充実のための方策について検討します。

（３）継続した授業改善の取組

①全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェック等の結果分析を活用して、各校の強み・弱みを把握し、「できない」を「できるようにする」取り組みを行います。

②言語活動の充実を図るための授業改善に取り組みます。

③「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善に取り組みます。

④ 中学校国語、英語の学びの補充に向けて、中学校国語科部会、中学校英語科部会を立ち上げ、授業改善に取り組みます。

（４）研修の充実

①学校の要請に基づき、学力向上アドバイザー、県と町の指導主事、紀北教育研究所の活用により、校内研修の指導・支援を図ります。

②町教育委員会主催で、「課題テーマ別研修会」や「実践者に学ぶミニ研修講座」を開催します。

③ 新学習指導要領完全実施や授業改善に向けた先進校視察を行います。

④ すべての教諭がＩＣＴを効果的に活用できるように、紀北町単独で１人１台端末研修を継続開催します。

（５）補充学習の充実

①授業後半の「振り返り」「適用問題」等から見えてくる子どもたちのつまずきから、放課後、長期休業中の補充学習につなげます。

②補充学習には、「全国学力・学習状況調査過去問」、「みえスタディ・チェック過去問」、「三重の学-Viva!!セット」等、各種ワークシートを活用します。

（６）家庭学習の充実

①ゲーム、ＳＮＳ、動画視聴の時間を減らし、家庭学習の時間を増やす「家庭学習習慣確立強化月間」を設定し取組みます。

②子どもたちの家庭学習の実態を把握するとともに、成果と課題について分析し家庭に還流します。

③紀北町スタンダードとしての家庭学習のあり方を設定し、児童生徒、保護者への啓発を進めます。

（７）読書活動の推進

①読書に親しんだり、授業で活用したりする活動を推進し、子どもたちが知識を広げ心豊かに成長するよう学校図書館活動の充実と活性化に努めます。

②「読み聞かせ」や「ブックトーク」等の活動の推進を図ります。

③図書館司書の配置を推進します。

④「読書のすすめ」、「ストップ　スクリーンタイム」を発行します。

（８）家庭・地域との連携

①規則正しい生活習慣づくり、また、携帯スマートフォン、ゲーム、インターネット等の適正な使用について、家庭と連携しながら取組を推進します。

②地域の産業、自然、文化、人材や伝統についての理解を深め、郷土を愛する心や地域に貢献する意欲ＳＤＧ’Ｓの課題解決に取り組む意欲を育むよう、地域と連携しながら取組を推進します。

（９）その他

児童生徒一人ひとりが居心地の良い学校・学級集団をつくり、安心して学べる学習環境をつくるために、すべての学年において学級満足度調査（Ｑ－Ｕ）を実施し、その結果を活かした生徒指導を行います。

家庭・地域のみなさまには、今後も紀北町の教育活動へのご理解・ご協力とともに、子どもたちの成長へのサポートを引き続きお願いいたします。